

ドミトリエフスキーによる『象胥紀聞』小田幾五郎』 翻訳本、その影響

金 洵

1. はじめに

ロシアサンクトペテルブルク東洋学研究所に所蔵されている朝鮮語のテキストは、近年、朝鮮語の歴史的研究として従来研究に使用されてきた中央語資料からうかがい知ることが出来ない情報を提供する¹⁾。ただし、それらの多くは外交官であるアストン並びに、メルンドルフのコレクションにもとづいた情報であり、もう一人、ドミトリエフスキーのコレクションからの情報は皆無に等しい。A. Ф. Троцевич, A. A. Гурьева²⁾によれば「朝鮮コレクションの基礎は3人の外交官のコレクションから成っており、その一つがドミトリエフスキー(1851-1899)によるものである。そしてそれは1908年に科学アカデミーが購入し、その一部はアジア博物館やペテルブルク大学に移された。ドミトリエフスキーは、中国と朝鮮、そして日本の作品を蒐集した」と述べられており、I. F. ポボワ³⁾においても「1907年にはアジア博物館に、外交官にして中国学者のピョートル・アンドレーヴィチ・ドミトリエフスキー Petr Andreevich Dmitrievskii (1852-1899年)のコレクションが収められた。(中略)コレクションの中にあるのは、基本的に朝鮮の歴史、地理、思想について漢文でものされた木版印刷物である。のちに(1917年以降)アジア博物館の朝鮮語フォンドにはイギリスの外交官 U. Dzh. アストン Aston (1841-1911年)のコレクションが加えられ、さらに、第二次大戦後には P. G. フォン・メルンドルフ fon Mellendorf (1847-1901年)のコレクションからの図書が加えられた」とあるものの、これまでロシアにおける朝鮮語研究の場に、ドミトリエフスキーの名がそれほど挙げられたことはない。L. R. Koncevic⁴⁾が、韓国語の科学的研究の開始は、G. V. Podstavin の名前と結び付いていると述べているように、従来の研究では Podstavin がその第一人者として認識されてきた。だが、Podstavin はロシアではなくソウルで、ドミトリエフスキーコレクションからリストを構成した。Podstavin が登録した『朝鮮のリスト』の全ての本は、ドミトリエフスキーが朝鮮で購入した (A. Ф. Троцевич, A. A. Гурьева) との記述は看過することはできないもので、ロシアにおける朝鮮語研究の新たな展開を示すものである。

ロシアサンクトペテルブルク東洋学研究所に所蔵されているドミトリエフスキーのカタログ本⁵⁾には、著書名を記載言語毎に分類し一覧⁶⁾としてあり、その中には中国語本 320 種 (No. 1-320)、朝鮮語本 65 種 (No. 347-411)、そして日本語本 21 種 (No. 326-346) を見ることができる。多分野にわたるコレクションのうちのひとつに『象胥紀聞』^{しょうしよきぶん}があり、ドミトリエ

フスキー自らがそれをロシア語に翻訳しているが、それほど知られていない。『象胥紀聞』は、1794年に対馬藩の朝鮮語通詞小田幾五郎によって書かれた朝鮮古地誌⁷⁾であるが、従来研究ではロシアにおける朝鮮語研究の先駆者と呼ばれている Podstavin が活躍する前⁸⁾に出版されていたもので、これをドミトリエフスキーがロシア語に翻訳し、出版していたことは大変興味深い。

今回、筆者は1884年ドミトリエフスキーによって編まれた『『象胥紀聞』小田幾五郎』の翻訳本を紹介するとともに、それがロシアにおける朝鮮語研究、並びに朝鮮の認識にどれほどの影響を与えたのかを探ってみたい。

2. ドミトリエフスキーによる『『象胥紀聞』小田幾五郎』翻訳本の特徴

2-1 ドミトリエフスキーについて

ピョートル・アンドレーヴィチ・ドミトリエフスキーは1851年に生まれ、1871年ヴォログダ神学校を卒業したのち、サンクトペテルブルク東洋学部を1875年に卒業した。I. F. ポポフ⁹⁾によると、1891年から99年までソウル領事として勤務していたとされる。

2-2 小田幾五郎と ОТАНО КИГОРО (オタノ キゴロ)

現在、Boris Yeltsin Presidential Library と東洋文庫¹⁰⁾に所蔵されているドミトリエフスキーによる『『象胥紀聞』小田幾五郎』の翻訳本(以下、翻訳本)は、菅野¹¹⁾並びに高松茂¹²⁾の研究で紹介はされているものの、今日までその分析を行った研究は見当たらない。著書名は「ЗАПИСКИ ПЕРЕВОДЧИКА, СОСТАВЛЕННЫЯ ПЕРЕВОДЧИКОМЪ ПРИ ОКРУЖНОМЪ УПРАВЛЕНІИ НА ОСТРОВѢ ЦУСИМѢ ОТАНО КИГОРО.」であり、日本語に直訳すると「翻訳者の記録 オタノ キゴロ 対馬での翻訳作業」となる。ここでまず注目すべき点は「小田幾五郎」のロシア語訳である。

中国学者でもあったドミトリエフスキーは、漢字の読みについて不便がなかったと推測されるが、「小田幾五郎」の田の字の漢字を清音に、幾の字の漢字を音読みで解いてロシア語で記したり、姓名の間に「の」を入れて「おたの」と読んだりと覚束ない。それ故、この翻訳本のオリジナルの著者が、18世紀、日朝関係の最前線で活躍した¹³⁾人物であるとの認識は、ロシアにおいてこれまでなかったように思われる。そのことについては次章で改めて検証することとして、ドミトリエフスキー自身が「小田幾五郎」についてどれ程の認識があったかどうかは、翻訳本の「翻訳者から」の箇所で見ることが出来る。

著者は対馬で朝鮮語の通訳官であり、まえがきでも述べているが、日本について朝鮮の役人との基本的なやり取りのメモを自ら編集した。だが、ためらいもなく筆跡したところを見ると、別の典拠資料、例えば、朝鮮についての日本、又は中国の作品から自身が指摘、言及したものかもしれない。著者は朝鮮に殆どいなかった。少なくとも彼はこれ

に関してどこにも言及していない。テーマが小さい割には、そのほかの朝鮮本と比較して、その情報量は十分で、且つ、詳細で正しい（ロシア語訳は著者による）。

ドミトリエフスキーは、小田幾五郎の存在すら知らず、さらに翻訳本の底本が『象胥紀聞』であるとの認識もなかったと思われる。そのことは、翻訳本には、引用等で参照した著書名を朝鮮語の発音で表記している例¹⁴⁾が見られる中、底本の著書名を朝鮮語の発音で表記せず、『象胥紀聞』を単語の意味そのまま『ЗАПИСКИ ПЕРЕВОДЧИКА』（通詞その記録）直訳していることから、推測できる。翻訳するに至った経緯については、駐日ロシア大使エフゲニー・ビュチョフより日本駐在中¹⁵⁾に自ら手に入れた本を頼まれて翻訳することになったと述べており、そのことからドミトリエフスキーはこの本の著者と底本について知らなかったと推測される。

2-3 翻訳本の特徴

翻訳本の底本である『象胥紀聞』は、川端¹⁶⁾によると、寛政六年(1794)小田幾五郎が四十歳の頃、自ら渡朝し見聞して得た知識や当時の朝鮮の実相を基に歴史、地理、風俗などを調査記録したものであり、朝鮮国の国情全般に渡る知識を総括して述作したものである。オリジナル本¹⁷⁾と翻訳本との目次を対比してみる（表1）。

表1

象胥紀聞	翻訳本 目次	著者による日本語訳
歴世	I. Краткія историческія свѣдѣнія о Корей	朝鮮について簡潔で歴史的な情報
朝儀	II. Придворные обычаи и правила, съ прибавленіемъ- о расположеніи столицы, о правилахъ для столичныхъ жителей, о Ванскихъ кладбищахъ и объ отношеніяхъ къ Пекинскому Двору	裁判所と慣習の規則。付言して、都について。住民のための規則について。墓地について。北京裁判所に関して。
道里	III. Провинціальная администрація, съ прибавленіемъ- о лутяхъ сообщенія, замѣчательныхъ горахъ, рѣкахъ, крѣпостяхъ и торговыхъ рынкахъ	道の行政。付言して、交通路。素晴らしい、山々、川、要塞、取引市場について。
節序	IV. О праздникахъ	休日
人物	V. Характеристическія черты жителей Кореи, съ прибавленіемъ- о буддизмѣ	朝鮮住民の特徴。付言して仏教について。
官制	VI. Постановленія о чиновникахъ, -сб прибавленіемъ- объ экзаменахъ и процессіяхъ при парадныхъ выѣздахъ чиновниковъ	官吏についての法令。付言して科挙と官吏の外出パレードについての手順。

禮* ¹⁸⁾	VII. Обычаи и церемоніи- при надѣваніи въ первый разъ шапки, при бракъ, похоронахъ и жертвоприношеніяхъ	慣わしや式。初めての結婚、葬儀、生贄。
戸籍	VIII. Посемейные списки населенія, съ прибавленіемъ - о поземельной подати и о количествѣ обрабатываемой земли, даваемой правительственнымъ учрежденіямъ и различныхъ степеней чиновникамъ	各家庭の居住リスト。付言して、土地所有に関する届出。政府機関から与えられた耕うん地。
文藝	IX. Литература и искусство	文学と芸術
武備	X. Военная защита страны	国家の軍事防衛
刑律	XI. Уголовные законы	刑法
度量	XII. Мѣры и вѣсы	措置と告知
服色	XIII. Платье	衣服
飲食	XIV. Пища и питье	食物と飲料
第宅	XV. Жилища	住居
物産	XVI. Мѣстныя произведенія, съ прибавленіемъ - о земледѣліи	地方産物。付言して、農業。
雜聞	XVII. Смѣсь: рассказы о разныхъ достопримѣчательныхъ вѣсахъ въ Корей	寄せ集め：朝鮮の注目に値する様々な物語。

翻訳本の頁数がオリジナル本の倍以上に至るのは意識によるものと思われる。また、脚注¹⁹⁾に紙幅を費やしているのもこの翻訳本の特徴で、ドミトリエフスキー自身も「翻訳で説明解説やテキストの補足のため必要と考えたものは、その脚注で漢語や欧州語での朝鮮について書かれた別の作品より指摘した」と「翻訳者から」で述べている。尚、別の作品とは大典通編や、L'Histoire de l'Eglise de Coreeなどを指している。

3. 翻訳本がロシアに与えた影響

先述したとおり、ドミトリエフスキーはこの翻訳本に由来する底本も、また、その著者も正確に把握してはいない。2010年に出版された Троцевич А.Ф.²⁰⁾による「Кто такой Отано Кигоро? (オタノ キゴロは誰?)」と題した論文²¹⁾は、翻訳本の底本の著者をめぐる論じている。そこには、「キゴロの「ロ」は、恐らく記録の録(року)、「キゴ」はブラシを振るという意味の揮毫(киго)から、つまり、「キゴロ」はブラシひと筆で作られた記録と翻訳することができる。極東文学は、エッセイ(随筆)のような作品に特有の名前をつける。よって、小田(?)の揮毫録、「オタ(Ота)に作られた、ブラシひと筆の記録」であると述べられており、少なくとも論文集が出版された2010年まではロシアにおいて、翻訳本の底本の著者が「小田幾五郎」であるとの認識はなされていない。また、同論文では、В. М. Тихонов²²⁾も翻訳本の底本の著者について問題提起していることも述べられている²³⁾。

ロシアでは、翻訳本の価値²⁴⁾を見出していたにもかかわらず、底本の著者名をドミトリエフスキーが誤謬したことにより、これまで翻訳本が正しく伝わって来なかったと推測される。ロシアにおいて底本の著者名が通詞職の最上位である大通詞²⁵⁾の小田幾五郎であると伝わっていたならば、おそらく翻訳本の取り扱い方は違っていただろう。日本、韓国における近世の朝鮮語研究で「小田幾五郎」の名はさほど珍しくない。ドミトリエフスキーが著者名を誤謬していなければ、翻訳本は間違いなくロシアにおける朝鮮語研究の場で重要な地位を占めていたと思われる。今日まで翻訳本がロシアの朝鮮語研究の場にあまり取り上げられなかったこと自体がそれを物語っている。また、中国人研究者²⁶⁾による翻訳本の著者名のあやまりも見られた。

4. ドミトリエフスキーと Podstavin との関係

最後にドミトリエフスキーと Podstavin との関係に少し触れたい。

Podstavin は、先に述べたようにロシアにおける朝鮮語教育の礎を築いた人物とされる。Podstavin 自身が教鞭をとっていた「東洋学院」において使用していた教科書類の一部は、何らかの既存テキストを引用・換骨奪胎したものであったことを以前明らかにしたが²⁷⁾、その際、これら既存のテキストは Podstavin 自らが朝鮮半島を踏査し、蒐集していたものとの見当をつけていた。実際に Podstavin は 1901 年から 1904 年の間、5 回²⁸⁾にわたり朝鮮半島に足を運んでいる。ただ今回、翻訳本の底本である『象胥紀聞』も含まれていた東洋学研究所所蔵のドミトリエフスキーのカタログ本は、Podstavin により構成されており、これを Podstavin が朝鮮語の教科書類作成において参考に行っていることは十分に考えられる。

5. おわりに

ロシアにおける朝鮮語研究がこれまであまり活発行われてこなかった理由として、資料の少なさが考えられる。そのような中、18 世紀の朝鮮を知りうる『象胥紀聞』が同時代にロシア語に翻訳されていた意味は大きい。また、その翻訳者でもあったドミトリエフスキーによる朝鮮語関係のコレクションは、今後、ロシアにおける朝鮮語研究の実態と歴史的過程を明らかにしうるひとつの具体例を提供するものであるだろう。

附記

【サンクトペテルブルク東洋学研究所所蔵、ドミトリエフスキーコレクション日本語並びに朝鮮語関係著書一覧²⁹⁾】

紙幅：19 cm

紙高：33 cm

大日本史	326
東國通鑑	327
國史畧	328
象胥紀聞	329
教科書	330
南海寄歸傳	331
棧雲峽雨日記	332
朝鮮 平安黃海兩道商況視察	333
新增 明治玉篇	334
交易問答	335
日本大文典	336
萬國史要	337
王政維新 日本勤王篇	338
朝鮮王國	339
支那未來記	340
大東合邦論	341
受驗應用 萬國歷史問答	342
已成 西北利垂鐵道	343
已成 日本歷史問答	344
清議報	345
訓蒙 日本外史	346
綱目	347
三韓舌譜	348
萬姓譜	349
筍子膳錄	350
草記膳錄	351
日記膳錄	352
* ³⁰⁾ * ³¹⁾ 卯整理儀軌	353
朱書百選	354
南漢日記	355
閩西寶興錄	356
文献備考	357
* ³²⁾ 源古宗	358
本朝大臣	359
禮儀	360
禮儀圖	361
* ³³⁾ 源譜畧	362
大學類義	363
退溪集	364
白沙集	365
三國史	366
知守齋集	367
彙纂麗史	368
佔畢齋集	369
二程全集	370
楓皋集	371
恥菴集	372
大典會通	373
四忠集	374

西厓集	375
禮書笥記	376
朝野輯要	377
忠武公集	378
國朝寶鑑	379
梅山集	380
東國文献備考	381
續史畧翼箋	382
稻古録	383
漢陰文稿	384
十七史	385
八大家抄	386
經濟類編	387
萬姓統譜	388
漢書評林	389
紀年兎覽	390
紀筆	391
一齋先生集	392
三隱詩	393
林庄杳稿	394
圭齋遺藁	395
* ³⁴⁾ 曹鼈鑑	396
進饌儀軌惣目	397
節谷先生遺蹟	398
南城誌	399
法規類編	400
全韻玉篇	401
簡禮彙纂	402
博古	403
海東史	404
黄江問答	405
簡牘精要	406
朝俄陸路通商章程	407
海東繹史	408
歷書	409
東國地図	410
大東地図	411

註

- 1) 岸田文隆「『漂民対話』のアストン文庫本について」朝鮮学会編『朝鮮学報』164、(1997年7月)、33-53頁など。
- 2) A. Ф. Троцевич, A. A. Гурьева, Описание письменных памятников корейской традиционной культуры II, (ИЗДАТЕЛЬСТВО С.-ПЕТЕРБУРГСКОГО УНИВЕРСИТЕТА, 2009), 12. Webでも閲覧が可能。
- 3) I. F. Попова「ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部 (SPbF IVRAN) の東洋写本コレクション」東京大学史料編纂所『東京大学史料編纂所研究紀要』第18号、(2008年3月)、52頁。

- 4) L. R. Koncevich／菅野裕臣 譯註“蘇聯의 韓国語學”亞細亞研究, 14.2, (1971), 187.
- 5) 『Господину Академику К.Г.Залеману Согласно выраженному Вами желанию имью честь препроводить при семь рукописный каталогъ Книгъ библиотеки покойнаго П.А.Дмитревскаго составленныи въ Сеулѣ въ 1900 году. (ザレマニ様の願ひに従つて送る、1900年ソウルで構成した故ドミトリエフスキーによる7つの墨付きコレクションカタログ)』ロシアサンクトペテルブルク東洋学研究所に現在所蔵されており、資料 No. は APX.26 である。筆者が目撃した 2017 年 8 月の時点では、撮影、複写などは禁止されていた。西洋本には出版年、発行地が記載されている。日本語並びに朝鮮語関係著書の一覧は本論文に附記した。
- 6) 附記参照。
- 7) 川端千恵「対馬藩朝鮮語通詞の朝鮮認識——大通詞小田幾五郎を中心に——」関西大学大学院東アジア文化研究科『文化交渉 東アジア文化研究科院生論集』1、(2013年1月)、317頁。
- 8) 植田晃次「旧朝鮮語学の国外への影響——ロシア・東洋学院 G. V. Podstavin 教授をめぐる」(第63回朝鮮学会口頭発表論文、2012年、2頁)によると、1900年東洋学院の朝鮮語文学科に赴任して20余年同地で多くの教科書類等の編集を始めとし、朝鮮語教育に従事したとされる。
- 9) I. F. ポポフ「ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクト・ペテルブルク支部 (SPbF IVRAN) の東洋写本コレクション」52頁。
- 10) 請求記号：貴 IV-7-2/
- 11) 菅野裕臣“韓國關係露西亞語文獻目録(1854-1969)”(亞細亞研究, 14.4, 1971, 294)の中で、5. 歴史〈41〉Дмитриевский, Р. Записки переводчика, составленные переводчиком при окружном управлении на острове-Цусиме Отано Кигоро. “Записки Императорского русского географического общества по общей географии.” т. XII No. 4. 329стр. Санкт-Петербург. 1884. R. 드미트리예프스키이. 對馬島 朝鮮通詞 小田幾五郎著「象胥紀聞」. 「帝室 러시아 世界地圖學會 報告」と記載している。
- 12) 고승무 “제정 러시아의 한국어 및 한국 연구” (한글, 169, 1980, 200)の中で、「1884년 “상트페테르부르크” 에서는 “삐 드미트리엵스끼” “P. Dmitrevskij” 가 본디 대마도의 조선 통사인 소전 기오랑의 저서 “상서기문” 을 러시아어로 번역 출판했다.」と記載している。
- 13) 川端千恵「対馬藩朝鮮語通詞の朝鮮認識——大通詞小田幾五郎を中心に——」313頁。
- 14) 大典通編を Да-дьянь-тунь-бянь と表記している。
- 15) 1871年から1873年。
- 16) 註7に同じ。
- 17) 小田幾五郎著／鈴木棠三編『象胥紀聞』、村田書店、1979年。
- 18) 人偏に各の字。
- 19) 178(内訳はI-18、II-40、III-56、IV-5、V-7、VI-33、VII-6、VIII-5、IX-1、X-2、XI-1、XII-2、XIII-2、XIV以降はなし)の脚注をつけている。
- 20) サンクトペテルブルク東洋学研究所所属。
- 21) Троцевич А.Ф., “Кто такой Отано Кигоро?” Вестник центра корейского языка и культуры, Вып. 12. (2010), 126-129.
- 22) ノルウェーオスロ国立大学教授。
- 23) どこにどのような形で問題提起を行ったかは記していない。
- 24) Троцевич А.Ф., “Кто такой Отано Кигоро?” (Вестник центра корейского языка и культуры, Вып. 12. 2010, 127) では、ドミトリエフスキーの本は書誌学的に希少であると記されている。

- 25) 対馬藩の通詞職の分類については、川端千恵「対馬藩朝鮮語通詞の朝鮮認識——大通詞小田幾五郎を中心に——」で参照されたい。
- 26) 张建华「近世俄国文献关于朝鲜的记载和初识」(史学史研究、第4期、2010) ウェブサイト http://www.history.fju.edu.tw/data/chinese/Zhang/PDF/4_20-1.pdf (2019年1月6日最終接続) では、著者名を「雨森藤五郎」とあやまって記している。
- 27) 金洵「フランス国立図書館所蔵 Podstavin の著書について」第5回訳学書学会口頭発表論文、2013年。
- 28) 1回目：1901/5/6-1901/7/15 2回目：1901/8/15-1901/8/27 3回目：1901/9/5-1901/9/15
4回目：1903/5/29-1903/9/7 5回目：1903/12/2-1904/4/15
- 29) 数字はリストの整理番号と思われる。
- 30) くにかまえに素。
- 31) 幸へんに乙。
- 32) 王へんに睿。
- 33) 註32に同じ。
- 34) 木へんに録。